

▶時代の流れに抗して闘うテル

時代は、マルクス主義者や社会主義者を自称していた著名な知識人たちが、時流に乗るかのように変節して、中国に敵対していく状況でした。長谷川テルの手紙はこう続きます。

「人間というものは、こんなにもやすやすと良心の最後のかけらさえも、投げ捨てることができるものなのではないでしょうか。しかし、皆さん、私はあなた方を信じております。ただの一步といえども、あなたがたが彼らに近づかないであろうことを私は確信しております。なぜなら、進歩的なエスペランティスト、真実の国際主義者であるあなただけが、この戦争の意義と、それぞれがとるべき行動の正しい方向とを最後まで理解することができるのですから。

中日両民族のあいだには、根本的な敵対感情などはなにひとつありません。歴史をひもといてごらんください。その反対に、私たちはいずれの民族の側にも親密な関係を見いだすでしょう。1911年、中国の辛亥革命の当時、たくさんの日本人がお隣の民族の解放のために、自ら進んで血を流しました。また数年前には、両民族の労働者たちがプロレタリアートの解放のために、どんなにしっかりと手を握りあったことでしょうか。(中略)

この戦争に中国が勝利することは、たんに中国民族の解放を意味するだけでなく、日本を含むすべての極東の被抑圧民族の解放を意味するのです。それは、全アジア、そして全人類の明日への鍵です」

▶人民を裏切らなかったテル

テルの中には日本人民と日本の帝国主義者たちとの区別がしっかりとありました。

実は先の公開書簡より1か月前に、テルは上海で〈愛と憎しみ〉という文章を書いています。

「砲火と砲煙がこの国際都市をおおい、恐慌と恐怖の叫び声があがっている。

おそろしいまでに静まりかえった真昼の空気をふるわせて、砲声が轟いている。いま、あそこでは何百人という人びとが殺されたにちがいない。ある者は声もなく最後の息をひきとり、他の人びとの血塗られた肉体は、泥にまみれて苦しみもだえながら、のたうっているだろう。(中略) フランス租界のうち寒い街角という街角を、難民たちが蟻のようにくろぐと埋めつくしている。どの通りを通ろうと、しわだらけの手や子どもの手が、道ゆく人にむかってさしのべられる。

——誰がこんな目にあわせるのか？日本人たちだろうか？

——いや、そうじゃない！——私はいそいで頭を横にふり、全身の憎しみをこめて答える。——日本の帝国主義者どもなのだ！」

テルの姿勢は、大勢に流れる“進歩的な知識人”とは画然と、はっきりと違っていたのです。これは本当に特筆すべきことだと思います。

またこうも書いています。

「いま私は、できることなら中国軍に従軍したいとさえ思っている。中国軍が日本人民と戦っているからでなく、日本

の帝国主義者どもと戦っているからであり、中国軍の勝利がアジアの明るい未来に寄与すると思うからだ。

それと同時に、私は仲間といっしょになって、声をかぎりに日本の兄弟たちに呼びかける。——いたずらに血を流すのは、おやめなさい。あなた方の敵は、海の向こうの中国にいるのではないのです、と」

▶上海を脱出し南方へ向かうテル夫妻

上海の租界にも日本軍は攻め入り、安全地帯ではありません。テルは夫の劉仁とともに、抗日戦争の

第九回 エスペランティスト長谷川テルの人生②

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるいよしひろ)

新しい中心地である漢口に向かうべく、上海を脱出します。途中、香港や広州に滞在するなど1年ほどの旅の末に、武漢で郭沫若やエスペランティストの胡愈之らの計らいで国民党中央宣伝部国際宣伝処の対日科に迎えられ、マイクの前で日本軍の将兵たちに日本語でこう訴えました。

「日本の将兵の皆さん！ 皆さんは、この戦争は聖戦だと教え込まれ、そう信じているかもしれませんが、果たしてそうでしょうか。違います。この戦争は、大資本家と軍部の野合世帯である軍事ファシストが、自分たちの利益のために起こした侵略戦争なのです。日本にいるあなた方の家族は、おなかをすかせて、ひどく苦しんでいます」

正確なテルの日本語の声は、日本の将兵たちに動揺を与えたようです。テルの正体がしばらくして日本の「都新聞」が明らかにしました。都新聞はこう書きました。

〈今夏、わが無敵皇軍が漢口攻略の火蓋を一斉に切るや、今度はこの怪放送が漢口を舞台として毎夕行われ、日本軍の誹謗、日本経済に関するデマを紅い唇に載せて毒づき始めた。かくて、去る二十七日午後五時三十分！ 神速皇軍の威力が完全に武漢を圧したその刹那から、この怪放送はハタと止まってしまったが、間もなく覆面の女性長谷川照子の全貌が明るみに曝されるに至った〉

その記事の見出しにはこうありました。

〈「嬌声売国奴」の正体はこれ 流暢・日本語を操り 怪放送 祖国へ毒づく “赤”くづれ長谷川照子〉

東京のテルの実家には新聞記者が押しかけました。テルの父親・幸之助は、「私としては、私の子である照子が断じて祖国に弓を引くような女でないと信じますが、もしそうだったら私は日本臣民の名誉にかけて立派に自決する覚悟をしております」と語りました。その後、当時58歳の父親のところには「自決せよ」という手紙が少なからず投げこまれました。

この時代、中国は日本の帝国主義者たちとの闘いに対しては激しい内部争いが生じていた時代で

した。

まず、1936年西安事件(事変)が起こります。この12月、国民党の若き闘士、張学良が西安で蒋介石を監禁し、内戦停止を要求しました。この時、周恩来が登場して調停を行った結果、蒋介石から内戦停止と、一致して日本に対して闘う約束を取り付けました。いわゆる第二次国共合作が成立したのです。

この激動の時代、テルは武漢に3か月ほどいて、国民党中央宣伝部対日科とともに武漢を離れ、重慶に向かいます。一方、周恩来、郭沫若、胡愈之の3人は1938年1月、国民党統治地区の武漢市内で「新華日報」を発行した後、同年10月武漢を去り、重慶に移りました。ちなみに、広島に原爆が投下された時、この新華日報は「原爆投下は人類への犯罪であり、許されない。原子力は平和利用に活用すべきだ」という社説を書きました。一部に、日本に対して「ざまあみろ」というような声があったにも関わらず、国際主義的精神を発揮したのです。

国民党、共産党と一線を画すもう一つの政治勢力に汪兆銘(号は精衛)のグループがありました。

汪兆銘は国民党の重鎮でしたが、蒋介石の個人独裁を批判し、また理論家として一切の官職に就かなかった清廉さが人望を集めました。日本との平和を求め1938年、陳公博、周仏海らとともに重慶を脱出しハノイに向かい、対日和平声明を発表しました。

このような複雑な中国国内の動きをテルはどこまで理解していたのでしょうか。結果的にテルは、1938年の冬から1945年の冬まで重慶で暮らし、最終的にテル夫妻は国民党中央宣伝部対日科を離れて、郭沫若の対敵文化工作委員会に移っていきます。そして周恩来が指導していた「新華日報」や延安から発行されていた「解放日報」などにもテルの文章が発表されていたようです。テル夫妻は国民党から離れて中国共産党に共感していったのでしょうか。(続く)

■(この項については高杉一郎著『中国の緑の星—長谷川テル反戦の生涯』に多く負っています)